

山口先生へ

鈴木 陽一

お世話になった山口先生に、花束に換えて三篇の小文を送ります。さぞかしお暇になられるでしょうから、暇つぶしになるように願って文を草しました。その工夫の余り、例によって些か無礼な表現があるかと思いますが、それは御容赦下さい。

(一) 山口先生傳

山口先生、諱は建治、四国は讃岐三木町の人なり。幼くして学を好み、十有八歳にして漢学を学ぶべく、讃岐を離る。見事に難関を突破し、喧噪の浪速に赴き、大阪外国語大学において中国語を学び、更には小学、就中音韻の学を学ばんとす。これ、ひとえに山口先生、見かけによらず、その性、理を好むがゆえなり。

若き読者のために一言、大阪外国語大学はかつて上本町にあり。この地はもと寺町にして、その通例に倣い、仏閣と墓場と狭斜の巷が今に至るも混在せり。大阪外大はその一角にうづくまるが如くあり。堂々たるべきその

正門は小学校に及ばずとも言えども、陳舜臣、司馬遼太郎などの異才天才を排出せし世に隠れなき名門なり。しかるに、これを由緒ある寺町から引きはがし、人と猿とがその数を競い合う箕面の山奥に移さしむるは天下の愚行に他ならず。しかも愚行はそれにとどまらず、ついには同大学をまるごと、大阪大学をして吸収せしむるに至っては言うべき言葉を知らず。ここに、伝統ある大阪外国語大学は、その名前もまた歴史より消し去られしは、ひとり大阪外国語大学のみならず、日本の大学の歴史においても汚点として記録されるべし。筆者の母校もまた、石原某なる人物によってその名を失いたることをも併せてここに記し、為政者のみならずこの暴挙を看過せる大学人にも猛省を促さんとす。

閑話休題、山口先生、外大に入学し、「bq、pq、mo、fo」を始めし頃、世界は疾風怒濤の時代に突入せり。立ち上がり、隊列を組み、街へ出でし若者の、世の不正と不公平への怒りの声は日に日に激しく、義に篤く悪を憎む山口先生、もとより黙して語らざる能わずして、ついには闘いに立ち上がるに至る。孔子は「三十にして」、山口先生は青春ただ中の「二十にして」立ちたり。先生の面目まさに躍如たりと言うべし。

山口先生、この時以来、遠く中国の民草に思いを馳せるに至り、斯文を捨て、文学に志す。しかれども、山口先生、その求むるところは、唐土の百姓の心を知る事にして、いんてりの文学には些かも興味なし。初め、超樹理の現代小説を読むもこれに足らず、明代の通俗小説を学ばんとして、一九六九年杜都仙台へ雄飛し、東北大学の門を叩き、内田道夫、志村良治両教授に師事す。これより修士、博士課程を学びし後、一九七四年より助手として同大学に奉職す。この時期、逸話数多あるも、いずれも風説の類にして、確たる証拠も（多分）見当たらずれば、取り上げるべからず。唯一、山口先生日参せし酒保の老板を、自らの華燭の典に招請せしは事実にして、

山口先生の公平にして温和なる人柄の証左たれば、ここに記す。

山口先生、助手を勤むること数年にして神奈川大学に移りたり。当時は学科なく、教養の中国語を教えるのみ、しかもその身は独身なれば、同僚とともに盃を挙げる日々が続き、酒の上の逸話少なからずあり。しかれども、たとえ些かの失敗これあるとも、その公正にして温和なる人柄は多くの人の愛するところにして、いつの頃から先輩同僚、いずれも先生を「山チャン」と呼ぶに至りしを見れば、過ぎし日の小事をあれこれ記すは、俗に云う「毛を吹きて小庇を求む」るにすぎず。全て省略に従うべし。

山口先生を招請するところの岡本先生退休に及び、後任を選ばんとするも、不運重なり、三年目にしてようやく決まりたる後任が筆者なりしは、案ずるに、山口先生にとりて、人生最大の不幸にして、先生の白髪、以来急速に増加したるも理の当然ならむ。

さて、山口先生と共に、中国語学科を設立せし経緯は後にマジメに記すこととし、今省略に従う。ただ、二点、後人のためここに記す。中国語学科の設立に際して、尾上、那須両先生を招聘し、無事設立に至りしは、山口先生を信頼せる人の支援の結果にして、偏に山口先生の爲人の賜物なり。さらには三十年を迎えんとする中国語学科の歴史において、山口先生の爲人を以て困難を克服せしことも数知れず。このこと我々は決して忘るるべからず。

山口先生の為人、多くの人の支持を受け、学部長、理事の要職を経たりしは、以て当然のことと言うべし。要職にありては、他にこびず、へつらわず、堂々と主張すべきを主張し、人間科学部と国際文化交流学科を設置せしめたるは、先生、仁を以て治むる王道を歩みしがゆえに他ならず。これを誇りて、先生の歩みし王道は些か馥

郁たる酒香ありとするも、古来優れた文人は微醺を帯びて詩作に取り組むものなれば、耳を貸すにたらず。案ずるに、古人曰く、大智は大愚に似たり。また、祇園の芸者衆曰く、「アホ仕たての賢い人がホンマに賢い人」なり。振り返れば、筆者の如き小賢しきだけの小人物は山口先生にはるかに及ばず、遠く仰ぎ見、かつひれ伏すのみ。

(二) 中国学科設立の経緯について

山口先生と私は、教養の中国語を担当し、スペイン語を除くいわゆる第二外国語担当の先生方とともに、運営に関わる仕事をしていた。このグループを、各言語のアルファベットの頭文字を並べて、「DFCR」と呼んでまずまず楽しくやっていたが、このままではいけない、我々だけでなく、外国語学部全体もダメになるというところで、新たな学科構想をまとめた。自身は一切略するが、名前が「国際言語（文化）学科」であったことを記せば、大体想像がつくのではないかと思う。我々は昔から同じ議論ばかり繰り返してきたらしい。ではなぜまとまらなかったか？　いくつも理由があり、その一つは狭いキャンパスにあったことも確かだが、外語にいろいろな分野の人が集まっている状況を、雑居だとして嫌う先生が多かったことが一番の問題だと私は思っている。いや、今でもそれは続いているかもしれない。なぜなら、カリキュラムを固定化された教員組織の中に押し込めないと安心できない先生が多いからだ。

さて、赴任三年目の私は、このプランをひっ提げて学部改革委員会に出席し、新学科プランを強く主張した。

ところが、突然、理事長から、中国語学科案が出てきて、学部長以下全員がこれに賛成し、反対したのは私だけということになり、中国語学科でいくこととなった。何と、DFCRから出ていたもう一人の先生まで、自分たちの案を捨てて、学部長に賛成したのである。

鶴の一声から始まった学科設立の話だったが、山口先生も私もあんまり関心はなかったし、多分我々の関知しないところで物事は決まっていくなのだらうと思っていた。特に私は、こんないい加減な神大に長居をするつもりはなかったから、正直なところ「知ったことか」という気分だった。ところが、事務局長から呼ばれ、恩着せがましく、「あなた方を設置準備委員会に入れてやる」と言われてむっときたが、勝手にヘンテコな学科を作られて、こちらにも迷惑が及んでは困ると思い、渋々参加した。この辺は、山口先生の方が私よりは裏を少しは余計に知っていたであろうと思うので、もう少し違った見方をしていたかもしれない。しかし、そんな思いは全く意味がないことがすぐ分かった。理事会で決めていたのは、小島晋次先生を呼ぶこと、小島先生に一人若手を連れてきてもらうこと、これだけであつた。それ以外の人事は白紙、定員も白紙ではないにせよ明確な方針なし、教室が足りないからこれから建てるなど、よくこれで学科を作ることを決めたものだときれかえった。

人事については、戯文に書いたように、山口先生の人柄と人脈とでまことにうまくいった。百点満点だと思う。しかし、問題はカリキュラムだった。松村先生にはいつも怒られているが、専ら中国語を教えることに集中する学科を作る気は全くなかった。これは山口先生も同意見だったと思うが、いくら教えても本人がやる気にならなくてダメ、動機付けが大事だと考えた。そのために文学部の要素をとりこむことにした。また、就職のことも考え、やはりいろいろな技能と知識が必要だということで、英語の必修単位を増やし、情報の基本を学ぶ科目や

国際経済を学ぶ科目などを必修選択にした。中国での語学研修や、中国から直接教員を招くなど、思い切った試みもした。

山口先生は、学部は大阪外大、私はずっと文学部、山口先生は基本は穏やかな人柄で、喧嘩は好まないが、私はすぐにカッとする瞬間湯沸かし器タイプ。改革も山口先生の方は一歩ずつと考えがちだが、私は手ぬるい改革ならやらない方がよいと考えるタイプ。従って、いろいろな場面でしょっちゅう意見が異なり、今から思うとよく空中分解しなかったと思うが、やはり山口先生の人柄がそれをさせなかったのだと思う。そして、かなり意見を異にする人間が議論をしたから、いろいろアイデアも出てきたのだと思う。

折からの日中友好ムードとバブル、それに受験者数の急増で、二年目には今の前期試験にあたる試験の受験者が五百名に達し、偏差値も60まで上がった。卒論も今から見ればびっくりするほどレベルの高いものがあつた。しかし、天安門事件でバベルの塔は一気に崩れ、今に至っている。だが、うまくいかなかった理由は、日中友好ムードがなくなったからだとは考えていない。失敗した理由は別のところにある。

先ほど挙げたいいくつかの試みは、今や全て消滅してしまった。そのことが学科が先細りになりつつあることと密接に関連していると私は考えている。たとえば、英語や情報の授業、私たちには担当できないから、専門の先生にお願いする、これは当たり前のことだ。だが、そういう先生が、中国語学科の学生にはどういう内容のどういうレベルの授業をすればよいのか真剣に考えてくれたか、我々の方も他学部・学科の先生方と率直に意見交換をし、授業の内容に関する要望を毎年伝える努力をしたか、答えは多分ノーである。これでは、学生たちが中国と直接関係のない科目を何のために学ばねばならないか理解できるはずがないし、そんな状態で勉強したのでは

面白いはずがない。

今でも覚えているが、情報の授業に出席している学生が共同研究室のパソコンで情報処理の宿題をやっていた。何をやっているのかと聞くと、プログラミングの初歩を習い、それを使って、ドラえもんの線画を描いているのだということだった。どうやら、文系の学生の情報処理の授業はこんなことばかりやっていたらしい。我々の考えとのギャップに愕然とし、次のカリキュラム改正で必修選択から外さざるを得なかった。他学部、他学科の学生に自分の専門分野の知識、技術をどう分りやすく、関心を持たせるように教えるか、これはまことに厄介な問題で、単にレベルを落とせば済む話ではないはずだが、こうした点にしっかりと配慮する教員は、今でもそう多数はいないのではないかと気がする。

語学研修や、中国から先生を招くというやり方が失敗したのは、これは別の理由だと思う。それは、こうした試みに伴う業務を我々教員に全て負担させたからで、こんなものが続くはずがないのは当たり前のことだ。この大学は、以前からかなり教育に関する部分がブラック化していて、意欲的な試みはほとんどがまるごと教員の負担増になる。折角の苦心の産物が、人手がないために消えていく、情けない話だがこれではとても受験者数を回復することなど無理ではあるまいか。

今、中国語学科では、学部と大学院とをフルに担当すると週10コマ、ここから授業をする時間と予習や採点に充てる時間を算出してみると、大幅なサービス残業をしていることになり、今の手当は子供だましに過ぎないのだが、そこにさらに負担が加わるようなことでは、とても思い切った試みなどできるはずがない。

山口先生の退休にこじつけて、気になっていることを書いておく。我々の頭脳は、頭脳や肉体を疲れさせない

ように、仕事でも運動でも、少しでもルーティン化してくると、習慣によって惰性的に処理するようになるらしい。これは組織が改革をした場合でも同様になるように思う。つまり、最初はある目的をもって、方法も工夫をしたうえで改革を行うが、時間が経ち、それに関わる人間（先生と学生）が変わっていくと、もとのままではうまくいかなくなるのでやり方も変える、これは当たり前のことだ。ところが、やり方を変えるときに、何のために変えるのかということが欠落してしまうことが多い。それはルーティン化した仕事に対して、私たちの頭が、とにかくこれを最低限のエネルギー消費で維持することだけを目標にするようになり、当初の目的が忘れられていくからだと思う。そうなれば、最小限の努力で維持できなければやめればよいという結論になりやすいのは当然だろうと思う。

古株が消えていけば当然ながら、当初の改革の目指すところがぼやけていき、学科でそれを共有できにくくなる。そしていつも大きな負担を抱えている我々は、エネルギー消費の節約のために、改革の名の下に当初の狙いとは全く別の方向へ向かっていくことに抵抗を感じない状況になりつつある。そこからは改革を本気で維持していく力はまず生まれてこないだろう。

無論、もともとの目的が正しかったとは限らないから、それに縛り付けられる必要などさらさらないのだが、せめて、改革の残骸については、一体なぜこういうことを始めたのかを確認してからゴミ箱に捨ててほしいと思う。そして、本当に必要な改革ならば、人、組織、金を要求して実現すべきだと思う。そうしなければ、二〇二〇年には生き残れないのではありませんか、山口先生。

思えば不思議な御縁であった。山口先生の外大の先輩林道生氏（静岡大学名誉教授）が後に都立大に学ばれた

ため、筆者にとっても先輩にあたる。実際に現代文学を専攻されていた林氏より教えを受けることも多かった。また、山口先生の師たる内田先生（東北大、都立大名誉教授）は後に都立大学中文研究室の主任となり、筆者の指導教授にあたる。つまり、山口先生は筆者にとって二重の意味で、紛う方なき兄弟子にあたるのだが、そのことを知ったのは、神大の人事がある一年前の京都での学会であった。しかるにこの弟子は甚だ傲岸不遜にして、些かも敬意を払うことなく、ことごとく逆らってきたことは、まことにもって不届き至極、天をも恐れぬ所業と言わざるを得ない。

（三） 餞として

山口先生は九十年代から日中の文化交流、特に民間の交流に強い関心をもって研究を続けてこられた。正直言って、最初は眉唾という感じがあったが、努力は無駄ではなく、少しずつデータも集まってきて、形をなし始めたのはお目出度い限りである。そして、どうやら私もそれに影響されたく、江戸時代の日本と杭州・西湖の関係をしつこく追いかけている。山口先生への餞として、先生の日中文化交流の研究を受け継ぐ意志表明とともに、当面のテーマについて言挙げしておきたい。

① 和歌浦と西湖

和歌浦は和歌山市の南に位置する遠浅の湾で、引き潮の際には大きな干潟が出現する。地形もかつてはかなり

特色があり、湾の西部にいくつかの小島が東西に並んでいた。今は一つだけ島が残っている。また、湾の東側には安珍清姫で有名な紀三井寺があり、それと向かい合う西側の陸地及び島には様々な神が祀られていた。またこの湾を遠目の俯瞰で見ると、ここが熊野古道への入口の一つとなっていたことも重要なポイントである。関西或いはさらに西から来る場合に、船を使って和歌浦までくるといのが一つのルートであった。

こうした、宗教的に重要な意味を有する場所があることは、新たにこの地を支配することになった紀州藩初代藩主、徳川頼信にとっては大きな問題であったと思われる。紀州には根来衆など、まつろわぬ人々の集団が存在していて、そうした集団と既存の宗教との結びつきは厄介な問題であったからだ。そこで、かれが行ったのは、この地に祀られている神々の神格を入れ替えていくことであり、最後に東昭権現を祀ることで、一応の決着を見ることがとなった。

さて、そこでの問題は何かと言えば、神々の異動の過程で、島と陸地との間に橋を架けて「三断橋」と呼んだことにある。この橋は、江戸時代の浮世絵にも描かれ、この地の名勝となったこと、江戸時代の観光案内に「蘇堤六橋」の風情ありと言われたこと、十代目藩主がその橋が中国風でないことをいたく気かけ、わざわざ長崎から専門家呼んで中国風のアーチ橋を架けていることなどから、些か不格好ながら、西湖の断橋を意識していたと想定できる。しかしながら、水戸黄門に西湖、断橋のことを教えた東臯心越の亡命の時期よりも十年ほど早くこの橋は架けられている。光圀が後樂園に西湖堤を造り、アーチ橋を朱舜水に造らせたよりも二十年は早い。では、頼信は、ここに中国風の橋を架けるといふアイデアをどのように得たのか、これは残念ながら全く謎である。

②心越と津和野

光圀の顧問として様々なたちで日本の文化に影響を与えた心越だが、中国から渡ってきた名僧として、日本人の尊敬のみならず、信仰に近い形で人々から愛されていた。その現れとして、心越はあちこちに揮毫を頼まれてこれに応じ、今でも相当数の扁額が残っている。その一つが、鳥根県津和野の名刹永明寺の「覺皇山」という題額である。

永明寺は今では森鷗外の「森林太郎之墓」という題字の墓があることで有名だが、もともとは津和野の大名亀井氏の菩提寺であり、大きな勢力を持っていた。この寺院の特色は曹洞宗の寺院でありながら、永平寺とも総持寺とも関係が悪く、京都の萬福寺と密接な関係を持っていたことにもある。心越は鹿兒島上陸後、初め長崎の興福寺（中国人の僧侶が開山）に滞在し、その後萬福寺に寄留していたこと、その後一旦長崎に移り、そこで軟禁された後に再び萬福寺に戻っていることから、京都―長崎の間を異動する際に、黄檗宗と縁のある永明寺に立ち寄り、題額を書いたということは十分にあり得る。そうであったとしても、このような山中の寺院が、なぜ中国から移住して間もない僧侶である心越がわざわざ立ち寄ったのかということの説明としては、そもそも萬福寺の開山が一六六三年以降、心越の来日が一六七六年という時間的なことを考えると些か弱い。やはり永明寺と萬福寺、或いは長崎の興福寺との関係が大きなポイントになる。

そこで注目されるのが津和野に入城した亀井氏の二代目当主政矩である。秀吉に才を見出され大名になり、徳川でも高い評価を受けて姫路に移封される内定がなされるほど信頼されていた。まさにやりてである。しかし、私が注目するのは、幕府内での世渡りではなく、自ら御朱印船を仕立てて中国との貿易を行うほどの国際派で

あったということである。従って、亀井氏及びその菩提寺である永明寺は早くから中国の仏教界とも関わりをもち、隠元が萬福寺を開くよりはるか前から日本にやってくる僧侶や、彼らが開いた寺院とも関係があった可能性が高いと考えた方がよい。亀井氏、永明寺がもっている中国とのネットワークに、隠元も加わり、後から来た人越も加わっていった、それがあの題額を書かせたというのが今の見当である。

亀井氏は二代目以後も、中国に高い関心を持ち、中国文化の吸収にも熱心であった。それが津和野の美術にも反映しており、特に永明寺所有の襖絵が西湖十景を題材にしていることに私は注目している。

また、亀井氏が中国文化への関心をもち続けたことを経済的に可能にした何かがあったのではないかというのが、私のもう一つ注目することで、これには津和野の隣で鉾山開発をしていた堀氏が関わってくるがこれはもう少し先の課題となる。

山口先生、先生と共に種を撒いた中国学科という日中交流の基礎となる若木を、そんなに簡単に枯らすつもりはありません。懸命に水をやり肥料をやりながら、育てていきます。幸いにも我々の仕事を受け継いでくれる先生方がその力を發揮しはじめました。前途は決して悲観すべきではないと思います。

山口先生が撒いた種、日中の民間の文化交流の研究も、尾上先生以来の俗文学研究という看板と並ぶように、微力ながら頑張ります。先生もまだまだ元気で頑張ってください。

本当に長い間有り難うございました。